夜間飛行

●ミステリについての独断と偏見

青木雨彦

早川書房

夜間飛行

●ミステリーについての独断と偏見

青木雨彦

早川書房

著者略歴
昭和7年生　昭和30年早稲田大学文学部卒
コラムニスト，評論家
主著書
「事件記者日記」（オリオン社刊）
「昭和ヒトケタ社員」（ダイヤモンド社刊）
「男の仕事場」（産業能率短大出版部刊）

検印廃止

夜間飛行
●ミステリについての独断と偏見

昭和五十一年八月十日　印刷
昭和五十一年八月十五日　発行

定価　一二〇〇円

著者　青木雨彦
発行者　早川清
発行所　株式会社　早川書房
郵便番号　一〇一
東京都千代田区神田多町二ノ二
電話　東京（二五二）一五二一（代）
振替番号　東京・六一四七九番

乱丁・落丁本はお取替えいたします

印刷・株式会社浩文社　製本・株式会社明光社

夜間飛行

●ミステリについての独断と偏見

各務三郎に

各務よ、各務、
この世で、
いちばん、ミステリアスなものはなあに？

试读结束：需要全本请在线购买： www.ertongbook

目次

左手の結婚　7
全面ゲラ替え　14
コラム作法　21
カッコわるさの子守唄　28
どうしても乗らなければならない最終バス　34
たとえば、彼　41
わが友フランシス　48
キャレラが笑っている　54
男たちの過去　61
ドーヴァー警部とこぼれたミルク　68

私説・迷宮課　74
わが「内なる差別」　81
オコ・ダカ・マカ・リキ　87
殺意が時を刻んでる　94
ホクロの効用について　100
ある父離れ　107
オレは、人を殺せるか　113
ミスター・ブランディッシの醜聞（スキャンダル）　119
緊急でない場合は　126
まり子が産んだからといって誰も涙なんか流しはしない　133
長生きも芸のうち　140
ポンチ的虚実論　147

わたしのソーニア　153
マリリン・モンロー・ノータリーン　160
誰がクリスティーを殺そうと……　168
九マイルは近すぎる　175
神経の問題　182
笑う読者　189
郵便配達はいつもベルを二度鳴らすとは限らない　196
助手席あるいは男の場所　203
料理される側の論理　210
愛しのローズマリーちゃん　217
マグレと若い女の死　224
殺しの三人　231

裁かれるのも、俺だ　238
恐妻家の自己弁護　245
わたしは、だーれ？　252
逃げろや、逃げろ　259
お釣りが来る！　266
別れの歌　272
引用索引　281
あとがき　291

左手の結婚

「そうなのよ。インチキなのよ」と、ママが肩をすくめた。アイシャドオも、なんにも描いてない眼が、キラキラと光っている。

例によって、カウンターで飲んでいるのは、わたしひとりである。チーフの賢さんを相手に、他愛もないことをしゃべっていたら、いきなり、ママが割り込んできた、というわけだ。

日曜の夜の、テレビの話なのである。賢さんが、NHKの、午後八時からの『樅ノ木は残った』につられて、山本周五郎の原作を読んだが、栗原小巻が出て来ない、と憤慨したのだ。

「あれは、阿木翁助とかいうひとの創作なんですって……」と、ママ。

「そうかなあ。阿木翁助だったかなあ。茂木草介じゃなかったかなあ」

賢さんは、ニヤニヤした。

すると、ママはあわてて、

「あら、阿木翁助も、茂木草介も、おなじひとじゃないの?」と、乱暴なことを言って、

「でも、たよを出さないなんて、原作者も、バカよね」
あくまでも、栗原小巻にこだわった。
「うん。平幹二郎に抱かれるとき、あの娘、きまって鼻の穴をふくらますでしょ？　あれが、エロチックで、なんともいえなかった……」
「いうわねえ、賢ちゃん」
わたしは、だんだん不愉快になってきた。ちかごろ、テレビをみてないわたしには、わからないことばかりである。そこで、つい、よけいなことを言った。
「山本周五郎って、あの『ながい坂』という小説で、膣外射精の描写をした作家だろ？」
「チツガイシャセイ！」
一瞬、ママはキョトンとしていたが、すぐに意味がわかったらしく、
「あーら、いやだ」
こんどは、けたたましく笑い出した。その声があんまり大きいので、とっくに、ボックスの客もシンとしたほどである。おまけに、ママにはわるいクセがあって、笑うと、むせびながら、ひとの膝をたたくのである。こっちは、恥ずかしくってしようがない。
でも、こんなとき、わたしは、フシギに、レイモンド・チャンドラーの、次の一節を思い浮かべているのである。
「出ましょうよ」と、彼女はおちついて言った。

试读结束：需要全本请在线购买： www.ertongbook

「想い出はそっとしておくのよ。私もそんな想い出がほしいわ」

キャディラックまで歩いてゆくあいだも、私は彼女にふれなかった。彼女の運転はみごとだった。女が運転がうまい場合には、その女は完全に近いといってよかった。

清水俊二訳『プレイバック』

ことわっておくが、わたしとママとは、なんの関係もない。ママがクルマの運転がうまいことはたしかだが、ママとうちの女房とはBG時代の友だちで、いちどそんなことになりそうになったとき、わたしがふざけて「そうだ、女房にことわらなくっちゃ」などとつまらないことを口走ったために……。

いや、こんなことはどうでもいい。

だが、マーロウのほうが、このわたしより、よっぽど女にくわしいらしいのは、なんとも、シャクにさわる話だ。チャンドラーは「彼の女性に対する態度は、精力旺盛で、結婚していなくて、ずっとそういう状態であったにちがいない男なら誰でも持っている態度です」（清水俊二訳『レイモンド・チャンドラー語る』）と説明しているが、それにしたって、結婚していても、べつに構わないではないか。

そういえば、

「そっちの手は？」

と、見知らぬ女が言った。

「酒を飲むために……」
わたしは、答えた。
「こっちの手は？」
「きみを抱くために……」
ひとは、それだけで、寝るのである。それなのに、なぜ、ママとわたしは、寝ちゃいけないのか。いやいや、そんなことは、このさい、どうでもいいはずであった。
さて――。
『プレイバック』である。この小説のなかで、フィリップ・マーロウは、もう一人の女性と寝る。ベティ・フィールドである。

彼女はまだ眠っていた。私が入っていっても、眼をさまさなかった。寝息もきこえず、やすらかな表情をうかべて、少女のように眠っていた。私はしばらく彼女をみつめていてから、タバコに火をつけ、台所へ行った。そなえつけの紙のようにうすい十セント均一店で売っているアルミのパーコレーターにコーヒーを入れて、火にかけてから、部屋にもどって、ベッドに腰をおろした。私がのこしていった置手紙は車の鍵と一しょにまだ枕の上にあった。
私は彼女をしずかにゆすった。彼女は眼をひらいて、まぶしそうに眉をよせた。
「何時？」と、彼女ははだかの腕をのばせるだけのばして訊ねた。「犬みたいにねむっちゃったわ」

じつは、とっさに三十代もなかばをすぎているのに、いまだに、この一節にひっかかっているところが、わたしのダメな点である。われながら、甘っちょろい、ということは、わかっている。いまさら、どうにも、ならない。

しかし、チャンドラーは、七十ちかくになって、この小説を書いたのである。そうして、十八歳も年上の妻のボウエンが死んだときも、悲しみのあまり、アルコール中毒になり、自殺さわぎまで演じている。わたしのほうは、ただ、読むだけだから、まだ罪は軽い、といわねばならぬ。

いうまでもないことだが、ヘレン・ヴァーミリアとの場合は、こうは、いかなかったろう。マーロウは、彼女の運転するキャディラックで、彼女の家に行く。

そして、ふたたび闇の中でうめくような叫び声がきこえ、ふたたびゆるやかな、こころよい静けさがつづいた。

「あなた、きらいよ」と、彼女は私の口に唇を押しあてて言った。「いまのが気に入らなかったんじゃないのよ。完全なことは二度とありえないのに、私たちは最初にそうなってしまったんだわ。もうあなたには会わないわ。会いたくないわ。しじゅう会えるんじゃなければ、全然会わない方がいいわ」

ベティ・フィールドと、ヘレン・ヴァーミリアと、そのどっちがマーロウとベッドをともにする

のにふさわしいかというと、それは、当然、ヘレンなのである。だから、チャンドラーは、小説の終わりになって、突然『長いお別れ』のリンダ・ローリングに電話をかけさせ、結婚をにおわせたのではなかろうか。

こうしてみると、ハードボイルドというのも、人生に似て、ずいぶん、いい加減なものだ、ということがわかる。事実、ひとは、恋を成就させるために結婚するのではなくて、恋から逃れるために結婚することもある。

「ねえ」

気がつくと、ママが、いつのまにか、山本周五郎の『ながい坂』全二冊を手にして、わたしのとなりにすわっていた。ボックスのほうにいったのだとばかり思っていたら、こいつ、本をさがしていたのだ。

ママは言った。

「あたし、この小説を読んだとき、主水正がかわいそうで泣いちゃったのよ。なのに……」

「なのに?」

「ねえ、さっき、あなたが話してくれたとこだけど、あれ、どこにあるの?」

おかげで、わたしは、薄暗いバーのライトの下で、あの部厚い小説のページをめくる破目になった。女は、これだから、困る。運転がうまい女でも、こうだ。

それにしても、気になる文章というものは、いざ、さがす段になると、なかなかみつからない。ひょっとしたら、わたしのカンちがいかもしれないし、いい加減、わたしは、じれてきた。

そんなわけで、わたしは、めんどくさくなって、次の箇所をママに読ませたのである。

……寝衣を替えて戻ったつるは、自分の夜具の中へ横になりながら、話したいことがあるけれど、話していいだろうか、と問いかけた。主水正が聞こうと答えると、つるはちょっとためらい、幾たびも云いよどんだ。「芳野にいろいろ聞いたんですけれど」つるはおそるおそる云った、「あなたは赤さんの出来ないように用心していらっしゃるのですか」

とたんに、ママは、カウンターに手を伸ばし、叫んだ。

「あらあら、こんなに薄くなっちゃって……」

わたくし、酒は、バカのひとつおぼえで、水割りである。

全面ゲラ替え

「そうなんだ。インチキなんだ」と、月田君が肩を怒らせた。月田君は、事件記者である。それがクセで、興奮してくると左の耳を引っ張るが、べつに耳に壁があるわけではない。

例によって、カウンターで飲んでいるのは、わたしひとりだ。チーフの賢さんを相手に、他愛もないことをしゃべっていたら、いきなり、月田君が割り込んできた、というわけだ。

杉並の、殺人事件の話なのである。賢さんが、あんな事件、わざわざ捜査本部などつくらなくたって、犯人は、はじめっから女房だということはわかっていたじゃないか、と憤慨したのだ。

「ちかごろの読者は、じつにうるさいねえ」と、月田君。

「そうかなあ。うるさいかなあ。うるさいのは、新聞記者じゃないのかなあ」

賢さんは、ニヤニヤした。

すると、月田君はあわてて、

「いや、払いますよ。払えば、いいんでしょ？　なにも、こんなときに借金のことなんか言わなく

试读结束：需要全本请在线购买： www.ertongbook